

*誕生について

誕生についての事柄として、教祖伝・教理史上に最初に出てくるのが、“よろづたすけの道あけ”といわれる「をびやゆるし」です。出産は一人の人間の歴史の中で一番神秘的かつ危機的な出来事ですが、「をびやゆるし」で人間誕生の不思議・自由の守護を味わうことによって、親神の神秘なお力・親心にふれることができる。ゆえに、教祖も、最初によろづたすけの道あけに「をびやゆるし」をお出し下さったのだと考えられるのです。つまり、「をびやゆるし」の信仰実践を通しての信仰の確立をすることの重大さを、先ず忘れてはならないと思うのであります。

*人間のはじまり

人間はいつから人間になるかの時点・根拠を考えてみますと、

- ・ 受胎で新たな情報系が立ち上がる時
- ・ 胎芽に神経系統ができて脳波が現れる時点
- ・ 胎芽が五分まで育ち胎児になり、チンパンジーなど他の霊長類とは違う DNA をもった時点
- ・ 胎児が四寸になった妊娠 16 週目
- ・ 「をびやゆるし」をいただけるようになる妊娠 20 週目以後。
- ・ 人間の意識が芽生える 27 週前後
- ・ お産のが終わった時点

等々、いろいろな節目が考えられます。

しかし、どの説を採るにしても、そこだけに割り切って確定するには、まだまだ議論が必要であり、また、その結論がでるかも不明です。

また、かりに論理的に人間の始まりを確定できたとしても、親としての心の安寧のために、“妊娠初期の水子でも霊として祀りたい”というような親の心情面での問題とのバランスも考慮する必要があります。さらには、人間の死の定義との論理的な対称性や整合性というような話になると、議論はますます複雑になります。

そこで、筆者は、人間の誕生はいつからという一時点を定めるのではなく、人間の誕生への経過期間の存在を考えればよいのではないかと考えています。つまり、魂を核として受精・身体の形成が始まるのですが、その魂の活動である心の働きが始まるのは“この一時点から”というのではなく、“魂が親神の懐から現世に出てきて目覚めつつある時間”を考えるのであります。

*妊娠・誕生の医療技術

不妊治療、人工授精、体外受精、代理母など、子供を授かるための技術を行使するについては、

「子多くて難儀もある、子無うて難儀もある。子ある中に、未だやへ、未だ追々という者もある。これ皆前生のいんねんである。」「中西金次郎（初代大江分教会長）子供の伺」
明治二十一年二月十五日

と、「おさしづ」にあるように、子どもが授かる、授からないというも“いんねん”によるのです。人間として大事なのは、

身体の貸し主の親神の意向に添うことであり、“子供の身体的存在にのみ捕らわれて、自らの心の自由をなくさないようにする”ことが大切なのです。



*妊娠中絶

たとえば、カソリックなどでは、だめなものだめ、中絶は絶対だめという。しかし、親神様は厳格にイエスカノーしか言われない裁きの神ではなく、「おさしづ」でも「しばしのところ許しおこう」というお言葉が度々出てくるように、人間の心情にも配慮して下さる親心あふれる神様です。よって、中絶についても、緊急避難的に容認して下さることも考えられないことではない。しかし、その中で注意すべきは、“人間の都合を優先して緊急避難の範囲を拡張過ぎない”ということであります。

*デザイナーベビー

子供の出産のコントロールについては、実は教祖がその先駆者であります。教祖伝には、真柱になるべき魂を、「梶本家の長男亀蔵として生れさせたが、親の想いがかかって中山家にもらえなかつたので、一旦出直させて、三男として生れ出させた」という有名なお話。それ以外にも、誰が誰の生れ更わりなどという話は、周辺にたくさん出てきます。

しかし、その教祖のお話と今の産み分けの技術の違いは、教祖はどの魂が誰かを分かっておられるが、我々人間には魂の世界が分からないということです。

その魂に関わる場所（人間の核一根本）が不明なままに、人間の身体的な部分だけを考慮して、生殖の回避、促進、調節に関わる技術、いわゆる産み分けの技術を用いることは、人間の根本的な尊厳を損なうことになると思われるのです。

生殖の回避、促進、調節に関わる技術、いわゆる産み分けの技術は、子供の立場からの発想ではありません。子供は、親神が、陽気ぐらしへの道を歩ませようとの思いで、この世に生まれ出される存在です。言い換えれば、どんな子もいんねんがあって生まれてくるのであり、子供を“つくる／つくらない”などと人間がいうのは傲慢であり、言うべきことではないのです。

この世に生まれ出された人は、すべて、親神によって生まれ出されたのであり、皆が与えられた環境の中で陽気ぐらしをして、親神様に喜んでいただくことができる存在であります。身体に障害を持って生れようが、LGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー）であろうが、この世に生まれ出る人は、皆、生まれるべきいんねんがあるのであり、我々、道の者は、誕生に込められた神秘から親神様の親心を感じて、子供が授かれれば結構、授からなくても結構、この世に生まれ出された環境の中で、皆が力を合わせて、親神様にお喜びいただける陽気ぐらし世界の実現を目指すのであります。